

提 言 ～「自然への畏敬」を保って共同体を再生するために～

玄侑宗久

梅原猛先生から、この度の災害は「文明災」であるとのことのご発言があった。このことを踏まえ、私は今回の復興構想会議は、新たな文明の在り方を構想するものでなくてはならないと痛切に思った。些か漠然としすぎているが、そこを起点に、私見を述べてみたい。

赤坂委員も言われたように、東北は、常に体制から遅れ、体制を陰で支え、また時には体制から攻められるものとしてあった。ヤマトタケルや坂上田村麿の蝦夷征伐に象徴されるように、東北人はいつも主流を脅かす異端として存在してきた。同時に東北は、広く縄文文化の土壌であり、狩猟採集という、自然と共に生きる暮らしを脈々と受け継いできた。縄文時代には人間同士の殺し合いが一件も見つかっていないが、そのこともこの地方の文明の基本的性格を物語るものだろう。

今回、被災した人々の状況がさまざまに報道され、国内だけでなく国際的にも大いに称讃されたことを、我々は肝に銘じなくてはならない。世界が称讃したのは、東北人が農民や漁民として培い、今なお保ってきた忍従の徳、あるいは天災を従容と受けとめる謙虚だが力強い姿ではなかっただろうか。

この国の主流が、経済原理に基づく競争原理で都市を形成しているとすれば、東北にはまだ別な世界が色濃く残っている。「絆」とか「共生」などと敢えて呼ぶまでもなく、協働の思想が彼らのなかには当然のこととして今なお息づいているのである。

漁民が恵比寿神を祭るなら農民も稲荷神を祭る。特に漁村などでは正月14日までに葬儀をすると神さまの機嫌を損ない、船の安全が脅かされるとさえ考える。いわば彼らの独特の信心が、経済原理や効率主義に従わせないのである。

彼らの心根が、そのような信仰、つまり自然に対する畏敬の念によって形成されたのは明らかだろう。また農業の「結い」や漁業の引き網における協力を持ちだすまでもなく、彼らにおいて人との繋がりは当然のことなのである。

そこから導かれる復興構想の基本理念は、東北人に色濃く残ってい

る「自然への畏敬」、および共同体の尊重だろうと思う。自然は、畏れ宥めるものであって、敵対し、戦って勝とうという相手ではない。また人間は、同じ畏れの元で助け合い、和合しつつ暮らす存在である。むろんこれは、日本人すべてに本来は当て嵌まるはずなのだが、残念ながら無意識なほどに西欧化し、効率化した現代日本にはむしろ稀な考え方になってしまった。

南三陸町の佐藤町長さんが言っていた。「今回の津波で、津波が防潮堤で防げるようなレベルでないことがよく分かった」と。そう、日本国内でこれまで最大だったのは、1771（明和 8）年に石垣島を襲った高さ 85 メートルの津波。三陸地方に限っても、1896（明治 29）年の明治三陸地震のときの津波は、38 メートルあったとされる。世界では 1958 年アラスカを襲った津波がなんと高さ 500 メートルである。

むろん、現在の技術の粋を尽くすことは大切なことだと思う。しかし大切なのは、どんなに技術を尽くそうと、我々は自然にはけっして勝てないのだという当たり前すぎる謙虚さを保つこと、そして技術はすぐに欲望に変化しやすい、という認識である。

地震にしても津波にしても、我々はそれと真っ向から戦うのではない。人事は尽くすにしても、あとは宥めて祭り、ご機嫌が悪くなれば逃げ隠れするしかない。その意味で、退路の確保、命だけは守るという基本姿勢こそが復興される市街地構想の核であろう。

また地震に対しては、特に「共に揺れて吸収する」ような構造も見直されるべきだと思う。私の住むお寺の本堂は、築 210 年に及ぶ古いものだが、これが震度 5 強から 6 の振動でも本体は全く無傷だった。お地蔵さんや塀や墓石はばたばた倒れたのに、礎石に柱が乗っているだけの本堂は、だからこそそこで揺れが大きく吸収され、さらに釘を使っていない木組みが揺れるほど上のほうで締まり、本体を無事に保ったのである。

老子のいう「柔弱の思想」とでも言えればいいのだろうか？

現在の建築基準法では認められないこのような工法も、今後は再考されるべきだと思う。

あくまでも自然は、怖いけれども恵みも与えてくれる。どこまでも自然をコントロールしようとするのが都市だとすれば、東北人はけっしてコントロールを目指すのではなく、恐れつつ感謝しながら山の

幸、海の幸を受け取ってきた。そのような東北を復興するのに、都市の理論だけで行なってはならないはずである。

先に安藤委員から、「鎮魂の森」という構想が提案されたが、そこに祀られる無数の魂も、やがては神になって我々に恵みさえもたらす。無念の思いで亡くなった無数の人々も、そのような祖霊神になり、いずれは東北らしい復興に、豊かな森の中で微笑んでくれるのではないだろうか？

今回の復興にとって最も大切なことは、我々の生きる同時代の仲間をかくも大勢喪ったこの震災を、彼らのためにも深く記憶して忘れないことである。

お金をかけ、これだけの備えをすればもう大丈夫、というやり方は、むしろ犠牲者のことを忘れさせると、鴨長明は『方丈記』に書いている。曰く「(新たに) 家を作るとて、宝をつひやし、心を悩ます事は、すぐれてあじきなくぞ侍る」。(中略)「月日かさなり、年経にし後は、ことばにかけて云ひ出づる人だになし」。

災害に遭うたびに家を小さくし、最後は「方丈」に住んだ鴨長明の真似はできないにしても、自然のなかに「仮住まい」する我々の作法として、自然への怯えと感謝を保つ復興こそを目指すべきだろう。

復興構想会議によって、この国が自然を制御する従来の西欧的文明から、自然に対して「怯えと感謝」を取り戻す方向へ大きく転換できるなら、夥しい死者たちにとってもなんとか「死に甲斐」があった、ということになるのかもしれない。

〔提言〕

- 1, 地震国日本に相応しい発電様式を、今後は福島県において研究発展させるべきである。【自然エネルギー特区のアイデアに賛成】
- 2, 新たな町づくりには、海沿いの「鎮魂の森」も望ましいが、地形によっては難しい場所もある。山側の高台に「鎮魂の丘」として広場を作ることを選択肢にあっていい。そこには慰霊碑などを建てて今回の死者を祀り、新たな祭の場に

すると同時に、もしもの時の避難場所にする。

- 3, 海岸近くの道路新設では、防潮効果を最大限に利用したい。
- 4, 行き過ぎた集約化は、東北の良さを減退させる。市町村それぞれのプランを聞くためのシステムを早急に構築すべきである。
- 5, 現在「分散居住」状態にある原発周辺地区住民の今後の生活基盤回復について、国は継続的に支援し、また早期の失地回復のため、世界の叡智を結集してほしい。
- 6, 風評被害や「Fukushima」差別を防ぐため、義務教育における偏りのない放射線教育を充実させてほしい。

〔緊急提言〕

- 1, 有事の際の電力会社は一時的にでも国家管理とし、避難指示などと同様、事故の収束についても国が責任をもって国民に告知すべきだと思う。また平時においても、原子力関係機関を整理し、序列のある一元的な組織で管理してほしい。
- 2, 初期の大雑把な野菜出荷制限や「直ちに健康に影響する値ではない」という文言が、風評被害を拡大した可能性は否定できない。今後国は、民間の宣伝広告なども通し、いわれなき風評の払拭に速やかに努力してほしい。

(H 2 3, 5 / 8)